

## 第6章 イランの言語政策

著者	縄田 鉄男
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	479
雑誌名	中東における中央権力と地域性：イランとエジプ ト
ページ	269-303
発行年	1997
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00012740">http://hdl.handle.net/2344/00012740</a>

## 第6章

# イランの言語政策

### はじめに

20世紀初頭の立憲革命期を経て国民国家として発足したイランは、その後も一貫して中央集権化政策が採られ、経済・行政・司法などあらゆる面での中央集権化が進捗し、国家統一化が推し進められてきた。この基本的政策はパフラヴィー朝によっても、新生のイラン・イスラーム共和国によっても採用されている<sup>(1)</sup>。

国民国家としてその第一歩を踏み出した立憲革命期、その選挙法において被選挙人資格として、単にペルシア語の会話能力だけでなく、最低限ペルシア語の読み書きができることが明記されている。このことから、国民国家の共通言語としてのペルシア語の地位を確立し、行政などの中央集権化と並んで、国家の統一の推進の手段としてペルシア語を用いようとの意図を察知することができる。このペルシア語政策はパフラヴィー朝にあっても新生のイラン・イスラーム共和国にあっても変化はない。

言語が、単に意思の疎通にその機能があるのみならず、集団帰属意識、集団結束力として役立つことは否定できない<sup>(2)</sup>。しかしながら、イランのような多言語国家・多民族国家にあっては、有力な言語の選択は反面において、弱小な少数民族の言語共同体の不満を惹起する危険があることも否定できない。ペルシア語はその歴史的・文化的または言語内的構造から、イランにおける公用語として相応しい言語と考えられるし、イスラーム共和国の憲法に明文

化されていることにも十分な理由を見いだすことができる。

多言語国家であるイランの巨視的言語社会学上の課題である言語政策を中心に論じるのが本稿の主たる目的である。

言語政策では、言語選択・言語改革・言語習得の諸問題が扱われるのが慣例である。言語選択については、多言語国家にあってはどの言語を国家語に据えるか、あるいはどの方言を標準語にするかの問題を扱う。言語改革は、文字改革と語彙改革の問題を扱い、言語学習では識字の問題を扱うことにする。

以下では、中央と地方という共通のテーマを視点にいれながら、第1節では、国家の庇護・推進を享受しているペルシア語の言語問題を論じるための前提である「多民族・多言語国家イランの一般言語事情」について、言語の分類・地理的分布・言語人口と少数民族の言語問題に分けて記述する。次の第2節の「言語構造的見地および社会言語学的見地からみたペルシア語」では「ペルシア語の成立」、「ペルシア語の語彙的特徴」、「科学技術用語・専門用語」、「ペルシア語の社会文化力」を扱う。

ついで第3節では「パフラヴィー朝期の言語政策」について、とくにアカデミーの語彙改革、識字運動、そして最後に、イラン・イスラーム共和国の言語政策に関して論じることにする。

## 第1節 多民族・多言語国家イランの一般言語事情

### 1. イランの諸言語の系統的分類と地理的分布および言語人口

イランの公用語であるペルシア語の位置付けを明確にする意味において、イランにおいて現在話されている言語をその系統によって分類すれば、次のとおりになる<sup>(3)</sup>。

#### (1) インド・ヨーロッパ語族イラン語派

ペルシア語	ペルシア人（総人口のうちの45.6%）
クルド語	クルド人（9.1%）
ギーラキー語	ギーラキー人（5.3%）
ロル語	ロリー人（4.3%）
マーザンダラーニー語	マーザンダラーニー人（3.6%）
バルーチー語	バルーチー人（2.3%）
バフティヤリー語	バフティヤリー人（1.7%）
(2) インド・ヨーロッパ語族アルメニア語派	
アルメニア語	アルメニア人（0.5%）
(3) チュルク語派	
アーゼリー語	アーゼリー人（16.8%）
トルキヤマン語	トルキヤマン人（1.5%）
(4) セム語族	
アラビア語	アラブ人（2.2%）
(5) その他	（7.1%）

次に各言語の分布や使用状況などに関して簡単に解説しておくことにする。

### (1) イラン語派の諸言語

言語地理学的には、インド・ヨーロッパ語族の東端を占めるインド・イラン語派を構成するインド・ヌーリスターニー・イラン語派のなかの一語派であるイラン語派の語域は、イラン、アフガニスタンを中心に、西はイラク、シリア、トルコ、東はパキスタン、さらに北は北西でカフカース、北東でタジク共和国、中国新疆ウイグル自治区、パーミール、南では、ホルムズ海峡によってペルシア湾から隔てられたオマーンの突端部に及ぶ。

#### ① 中央方言群

イラン中央部に位置する諸地域において使用されている諸語は中央言語群と汎称されている。ギャブリ語は、ヤズド、ケルマン周辺のゾロアスター教徒の言語である。その話し手はペルシア語の2言語併用者であ

り、言語人口は約8000人あまりである。

シーヴァンド語はシーラーズの北方のシーヴァンドで話される言語で、言語人口は約4万4000人弱である。

② セムナーン語

カヴィール砂漠の北辺のセムナーンとさらにその北のサングサルで話されている。

③ サングサリー語

②のセムナーン語と同様である。

④ カスピ海言語群

カスピ海南岸の東方にマーザンダラーン語、西方にラシュトを中心に、してギーラーン語が話されている。言語人口は、それぞれ200万、300万程度と推定される。

⑤ ターレシー語

カスピ海北西の山岳地帯、それに連続する旧ソ連アーゼルバイジャンで話される言語である。この言語の使用者はアーゼリー語との2言語併用者である。言語人口は、約22万人である。

⑥ タート語

ガズヴィーンを中心に、サーヴェから北のハルハールに至る地域で話されている。話し手の数は未詳であるが、ほとんどの話し手がアーゼリー語との2言語併用者あるいはペルシア語との3重言語使用者である。

⑦ ファールス言語群

ファールス州で話される諸弱小言語の総称である。

⑧ ラーレスターニー語

ファールス州の南部のラーレスターンにおいて話される言語で、話者数は10万余。この言語の話し手はほとんどがペルシア語との2言語併用者である。

⑨ クムザリー語

オマーンのホルムズ海峡に突き出た北端において使用されている遊牧

少数民族の言語であるが、詳細は不明。

⑩ ロル語

ロレスターンにおいて使用されている言語で、言語人口約250万。

⑪ クルド語

この言語はイランのみならずイラク、トルコ、シリアにも跨がる山岳地帯のクルディスタンに居住するクルド人の言語である。イランでの話し手数は約540万人。その他、イランのホラーサーンやトルキヤマニスタンにおいても若干の話し手によって話されている。言語史的、言語構造的にも極めて重要な言語であるのみならず、言語人口その他の言語社会学的側面からもその重要度は高い。ペルシア語、イランの隣国アフガニスタンの公用語であるパシュトー語につぐ、イラン系言語のなかの大言語である。

ちなみに、クルド語はイランにおいて用いられる言語のうちで、ペルシア語、チュルク系のアーゼリー語と並んで文字化されている数少ない言語の一つである。

⑫ グーラーニー語

バーフタラーン州の西方、イラクにかけて、ザグロス山中で話されている言語である。

⑬ ザーザー語

ユーフラテス川上流で話されている。

⑭ バルーチー語

イランではバルーチェスタン州を中心に、ホラーサーンなどでも話されている。アフガニスタンでは国語の一つに数えられ、またパキスタンのパローチスタン州の言語である。言語史的には極めて興味深い言語で、パキスタンでは文字化された言語であるが、イランでは文字化言語ではない。この言語の話し手が現在地に居住するようになったのは11世紀である。言語分類的には、安息国すなわちアルサケス朝の言語であるパルティア語に近い。その現在の地理的位置にもかかわらず、ペルシ

ア語とともにイラン語派の西方言語群に属する。

⑮ バーシュキルデー語

イランのミーナーブ北東の山地で話されている。

以上いささか詳細にその分布を中心に述べてきたが、その理由は、①イラン語派におけるペルシアの位置付けを明確にすること、②ペルシア語、クルド語を除けば、ほかに文字言語が存在しないこと、③少数民族言語とはいっても、クルド語のようにかなりの言語人口を有する言語から、歴史、文化などの言語外的要因ないし言語構造それ自体の脆弱性の著しい、極めて弱小な言語まであることなどを指摘しておきたいからである。

(2) アルメニア語派

テヘラン、エスファハーン、アゼルバイジャンに居住し、主として商業に従事しているアルメニア人によって話されているのがアルメニア語である。

(3) チュルク語派

次に、イラン的言語世界から転じて、チュルク系の言語に移ろう。

イランのチュルク系言語の話者は先に記したとおりであり、数値からみれば、大言語に属する。現在、アラビア・ペルシア文字による正書法を用い、新聞などにも用いられている。

① アーゼリー語

イランの北西部の都市タブリーズを中心に、その周辺に広がる地域、さらにそこから南東に向かってハマダーンやテヘラン付近に至る地域（オルミーエ、アルダビール、ザンジャンなど）で話されている。

② トルキヤマン語

イランではカスピ海南岸のゴルガーン付近およびホラーサーンの北東部で話されている。書き言葉としては存在しない。トルコ語、アーゼリー語と共に、チュルク語オグズ語群に分類される。

③ その他

チュルク系の言語を話す民族には、シーラーズ周辺に本拠地を置くガシュガーイー族、カスピ海の西側でソ連国境に近い地域に居住するシャーサヴァン族、オルミーエ湖周辺やホラサーンにも広がるアフシャル族などもある。言語研究は未だ十分でなく、その詳細は未詳である。

#### (4) アラビア語

フーゼスターン州の6割を占めると考えられる130万人のアラブ民族によって話されている。石油産油地帯に居住しているため、その存在は政治的にも微妙である。ペルシア語の識字教育は徹底せず、この言語の話し手は社会的にも低くみられている。彼らはアラビア語の公用語化を求めるなど少数民族運動も活発な民族である。

#### (5) 現代東アラム語

クルディスタン山岳地帯とその周辺で、ネストリウス派東方キリスト教(景教)徒の後裔と当該地域に離散したユダヤ人が母語として使用する言語で、ネオ・アラム語、新シリア語とも呼ばれる。

## 2. 社会言語学的問題と少数民族の言語問題

すでに述べたように、イランは国民の大多数が用いる言語が国語である状態、すなわち、国内言語的(endoglossic)な国家である。しかしながら、イランの公用語であるペルシア語を母語とする者は、総人口の45%にしかすぎない。それにもかかわらず、ペルシア語の公用語化をめぐる生じるであろうと想像される熾烈な「言語戦争」は起こらず、「言語問題」への関心や意識も必ずしも高くない。たとえ意識される場合でも、少なくとも表面上は、中央政府の要人はもとより、出自を異にする大多数の知識階層の人々や聖職者、あるいは学校の教師にとっても、「イランの言語問題」即「ペルシア語の問題」

と同一視されているといっても過言ではないであろう<sup>(4)</sup>。

なお、ペルシア語は言うまでもなく、現在のイランにおけるイラン系、チュルク系、セム系諸言語の話し手の第2言語であり、リング・フランカ(共通語)である。

例えば、マーザンダラーン生まれの人は、初等中等教育などの学校教育をペルシア語で受け、さらに高等教育段階ではますますペルシア語の必要性や重要性は増してくる。

家庭語としてのマーザンダラーニー語(カスピ海東岸において話される)を別にすれば、ペルシア語こそが社会生活での主要言語であり、教育語であり、公用語である。

その他の超弱小民族の言語については、事態はここで述べるまでもなくすでに明らかであろう。

イランでは少数民族に属する人々の言語ではあるが、その話し手の数からすれば第2位のアーゼリー語や第3位のイラン系のクルド語の場合ですら、イランでは公式の言語とは認められていない。ましてやそれ以外の弱小言語は言うまでもないであろう。その理由は、後のペルシア語の節で述べるが、ここであらかじめ述べておくならば次のとおりになるであろう。

ペルシア語はその成立以来の歴史的、文化的観点からして、その威信が極めて高く、イスラーム期になってからの各王朝の学術語、行政語、宮廷語の地位を堅持し、12世紀からは各王朝の公用語であった。また文学語としての威信は古典文学史を繙くものにとっては自明のことであり、幾多の散文、韻文を生んだ言語であることはここで贅言を要しないであろう。一言でいうならば、極めて有力で優勢な大言語としてのペルシア語の存在が、イランにおいて、例えば、インドやパキスタンなどに見られるような「言語紛争」や「言語戦争」が見られない理由であろう。紛争が起こるには余りにも他の少数・超少数民族の言語とは格差があり喧嘩の相手ではなかったというのが実情であろう。

イランでは、クルド語、アーゼリー語などの例を別にすれば、他の多くの

言語は言語選択の対象とはならなかった。その理由としては、数値的に少数者の言語であったことのほかに、それらの言語の「文字化」の問題が指摘できるであろう。

理想的にはすべての言語に文字が与えられるべきとの主張もあろうかと思われるが、国家統一という政治目的から行政語・教育語としての効率や伝達性をも考慮に入れば、この「一つの言語」の選択が、たとえ中央からの強制であれ、むしろ望ましいであろう。文字化による、言語改革でかえって経済的にも支障を来すことも考えられる。

文字化を行なうにしても、すべての現用の諸言語に対してというわけにもいかないであろう。言語それ自体の成熟度の問題——構造的にかつ語彙的に標準語、公用語として十分に機能しうるかどうかという点や言語の社会文化力が問題となろう。

中央集権国家の言語管理によって行なわれる言語選択・言語改革・言語学習などの言語政策の執行がやむをえないものであり、あながち悪として退けることが不可能であることも一面の事実である。少数者の権利を踏み躪る危険があるかもしれないが、当面は、イランでは、家庭語と国家の奨励するペルシア語との併用の方向を緩やかに推し進める方向が穏当な解決策であろうと思われる。このことは一面では、後述のファルハンゲスターンの活動や憲法による公用語の規定を是認することに繋がることになる。

言語は自他を区別する有力な印であり、民族の帰属意識を形成する最も強い要因であり、国家統一の要因であることを再度強調しておかなくてはならない。例えばクルド語、アーゼリー語、あるいはアラビア語の公用化の運動は依然として強く、これらの言語の話し手たちが疎外されたり、軽蔑の対象にされたりすれば、自己の言語を公式の場で使用できうる地位を与えよとの要求は必然的に起こってくる。

1980年にクルド民主党は、①イラン・クルディスタンの自治は、公認された合法的なものとして、憲法に記すること、②イラン・クルディスタンとはクルド人が住む地域全体を含み、この地理的区分を基礎にして、クルド民族

問題や要求に応えること、③外交、軍事、国防、生産に関する長期計画の4点を除いて、クルディスタンに関わる問題は、クルディスタンの住民自ら決定すること、④行政委員会を選出することになる地域評議会を選挙し、この地域をこの委員会が自治単位として統治すること、⑤クルディスタンにおける警察やジャングルメリーは、この地域住民の手中に置くべきこと、などの政治的要求と並んで、⑥クルド語を公式に承認すること、という項目を掲げている。

しかし、現在のイスラーム共和国の憲法にあっても依然として⑥の項目は承認されていない<sup>(5)</sup>。

## 第2節 言語構造的見地および社会言語学的見地からみたペルシア語

### 1. ペルシア語の文化的威信と言語構造

すでに述べたように、ペルシア語はイランの全人口の45%あまりの母語にすぎない言語であるが、文化語・教育語・公用語などとして使用されるにはそれなりの理由がある。

その理由の一つは、その歴史的・社会的威信などの言語外的なもの、およびペルシア語それ自体のもつ言語内的なものが考えられる。

まず言語外的理由としては、おおよそ次のごとき理由があるものと思われる。

近世ペルシア語は、イランが7世紀半ばにアラブの軍門に降って、2世紀にわたるいわゆる「沈黙の2世紀」の後に、中世ペルシア語を母体として成長し、アラビア文字をもって書かれるようになって成立した。

書きことばとしてのペルシア語は、「沈黙の2世紀」の後、9世紀から10世紀にかけて、イラン民族王朝たるターヒル朝(821~873年)、サッフアール朝

(876～903年), サーマーン朝 (874～999年), プワイフ朝 (932～1062年), さらに11世紀から12世紀にかけて, ガズナ朝 (962～1186年), セルジューク朝 (1038～1194年), ホラズムシャー朝 (1077～1231年) を経てイル・ハーン朝 (1256～1353年), ティムール朝 (1370～1506年), サファヴィー朝 (1501～1736年), アフシャール朝 (1730～1747年), ザンド朝 (1750～1794年), ガージャール朝 (1796～1925年) パフラヴィー朝 (1925～1979年), そして今日に至るまで, イランの学術語, 文学語, 行政語として用いられてきた。学術語, 宗教語としてはアラビア語が使用されたものの, セルジューク朝以降は一貫してペルシア語が行政語として使用されてきた。

歴史的にはダリウス大王やクセルクセース王の碑文に見られる古代ペルシア語, サーサーン朝の中世ペルシア語に遡る近世ペルシア語(普通単にペルシア語という)は, その輝かしい歴史的, 文化的威信を有するイラン語派最大の言語である。

簡単にいえば, ペルシア語の威信は, その歴史的背景と地理的拡大にあるといえる。

次に, ペルシア語の内的構造に起因する拡大の原因としては, ①文法的簡潔性, ②語彙的異質性, があげられる。

①については, 語形変化の規則性や不規則性の欠如などは, 初学者の等しく経験することであり, ②については, 外来語の多様さ, なかんづくイスラム期以降のアラビア語の存在があげられるであろう。

最も古いヘブライ文字による古文書や碑文, シリア文字による聖書の翻訳, マニ文字による詩文, その他アラビア文字による最古のアブー・マンスール・ムヴァファクの『薬学に関する基礎の書』などの作品はいうに及ばず, 『世界の境界』, 『カーブースの書』, 『四つの講話』, 『旅行記』, 『政治の書』など10世紀から12世紀にかけてのペルシア語の作品を繙くものは, すでに多量のアラビア語からの借用語がみられるのに気がつかれるであろう。

すなわち, ペルシア語はその初期からすでに語彙的には混成語の観を呈しており, 特にアラビア語要素はわが国の言語である日本語における漢語を思

わせる機能をもっている。ある語彙はまったく風化し、同化している語彙があり、またある語彙は本来の語彙とは違った語感や文体的特徴を有するといった具合にじつに多様である。この事実は重要であり、のちに述べるイラン・アカデミー (Farhangestan) の言語改革 (語彙改革) の俎上に上ったアラビア語語彙の駆逐がいかに困難であったか、また無謀に近いものであるかの証拠でもありと考えられる。

## 2. 現代ペルシア語における科学技術用語・専門用語

次節において詳説するように、イランがその近代化に伴い必要とされた言語改革の中心的課題は、前節のアラビア語<sup>(6)</sup>の駆逐と科学技術関連の語彙の問題であった。

19世紀になってからのいわゆる近代化 (西洋化) によって、思想、政治、科学などの専門用語から日常生活で頻用する語彙までを提供した西洋語はフランス語であったが、単なる借用の抑制と近代化に対処すべき語彙の新造成の必要性が感じられることとなった。

20世紀になってから昨今の科学技術の進歩はすさまじく、これを表現するのに必要な語彙に対していかなる措置を取るかは、イランのみならずアジア諸国の大きな問題でもある。

以下においては、広義の借用<sup>(7)</sup>、すなわち借用語、借用混成語、翻訳借用語、意味借用語について述べておきたい。アカデミーの言語政策、言語改革をより一層理解するにも役立つであろうと考え、ここで簡単に述べることにした。

### (1) 借用語

ここにあげる語は、借用混成、翻訳借用、意味借用に馴染まない語彙であり、そのほとんどが国際流用語彙に属するものである。

kerem クリーム      bāz 塩基      kārbon カーボン      notron

中性子 polip ポリープ film フィルム 'asid 酸  
 gāz ガス tirokisin チロキシシン periz コンセント  
 penisilin ペニシリン kolestrol コレステロール tiro'id 甲状  
 腺 perote'in 蛋白質 kārseit 方解石 pārafin パラフィン  
 lipid 脂質 vitāmin ヴィタミン

## (2) 借用混成語

合成語の一部が借用語で、他の要素が本来語で形成されるもので、ペルシア語では極めて生産的な語形成法である。

voltsanj ボルト計 borj-e kontrol 管制塔 zelzelesanj 地震計  
 kašti-ye 'atomi 原子力船

## (3) 翻訳借用語

各要素を意味的に分析して、本来のペルシア語を充てる方法で、科学技術関連の語彙や政治経済などの分野の語彙の一大供給源を提供している。

できるだけ本来の語をもって科学用語、専門用語を充てるという原則に最も適った生産性の高い語形成である。

noqte-ye nazar (point of view) 視点 noqte-ye zard (yellow point)  
 黄点 noqte-ye sābet (fixed point) 定点 noqte-ye kur (blind  
 point) 盲点 mādde-ye sefid (white matter) 白質 nimxatt  
 (half-line) 半直線 zirdaryā'i (submarine) 潜水艦 darunpust  
 (endoderm) 内胚葉 darunzād (endogenous) 内生の darun-  
 māye (endoplasm) 内質

## (4) 意味借用

vāhed 単位：単位（学校教育） cf. unit

cap 左：左派（政治） cf. left

abake 網：(…)網 例えば、鉄道網、放送網など cf. network

以上が主要な借用法であるが、近代的な制度、特に軍事、政治、司法用語にはできるだけ本来語を使用するのが次に述べる言語改革（なかならずく国語浄

化, すなわち, アラビア語の語彙的要素の一掃を目的とする言語改革)を断行しようとしたイラン・アカデミーの方針であった。

なお付言すれば, イラン・イスラーム革命後は, 祭政一致の原則から司法関係の語彙にはむしろアラビア語の使用が顕著になってきた。

### 3. 文字言語および話し言葉としてのペルシア語の社会文化力

ハールマン<sup>⑧</sup>は, 文字言語の社会文化力の指標として次の事項を列挙し, さらに, 活字量は, タイトル数と発行部数で算出できるとしている。

- (1) 単行本の活字量,
- (2) 原作・翻訳の活字量,
- (3) 散文・詩歌の活字量,
- (4) ノンフィクション (政治・経済・産業) 分野の活字量,
- (5) 雑誌の活字量,
- (6) 新聞の活字量,
- (7) 単一言語使用・2言語使用の新聞雑誌の活字量。

筆者の手元には, 上の事項に対して論じるだけの資料が存在しないので, 詳細は後日を期することにした。現在刊行されている各種の文献目録などを参照し, 活字量の算出を行なうなどの作業は, 今後の課題としたい。

いまここでは, *Iran Yearbook 1993*<sup>⑨</sup>によって若干の統計を提供しておくにとどめることにする。

まず, 現在のイランの新聞の発行部数は176で, そのうち日刊新聞は15, 週刊新聞は42, 隔週新聞9, 月刊新聞は53, 隔月新聞は9, 季刊新聞40となっている。176新聞のうちで, 首都テヘランで発行されているものが127で, 残余の49新聞は地方新聞である。

次に, 定期刊行物の雑誌は, そのほとんどが政府およびその附属機関の出版物である。以下そのタイトルと発行部数を掲げておこう。

*Kayhan Bacheha* (Children's Kayhan) 週刊誌 400,000部

*Danestaniha* (Knowledge) 隔週誌 60,000~70,000部

*Kayhan Varzeshi* (Sports Kayhan) 週刊誌 50,000部

*Donya-ye Varzesh* (World of Sport) 週刊誌 100,000部

*Film* (Film) 月刊誌 30,000~40,000部

*Sanat-e Haml-o Naql* (Transport Industry)

月刊誌 25,000~30,000部

また、大学などの高等教育機関や付属の研究所の発行する研究雑誌、単行本などを加えれば、かなりの数に達するものと思われる。さらに、政府、裁判所、検察庁、国会などの発行する膨大な量の法律、法令、報告書、議事報告書なども、すべてペルシア語で書かれているという事実を強調しておきたい。

ペルシア語の社会力は、その歴史的威信や文化的威信は別にしても、この点だけからもイランにおけるペルシア語の独占的優位性をみることができないのではないだろうか。

さらに、文字言語に加えて、話しことばの社会文化力というものを仮に考慮すれば、ペルシア語の優位性、独占的地位は次の事実からもより一層明確化されるであろう。

- (1) 総人口の45%の話者を有すること、
- (2) 教育語としての使用、
- (3) 放送語・映画用語などマスコミ関連の用語であること、
- (4) 2言語併用<sup>(10)</sup>の一方の言語としての使用。

ちなみに、現存の大学では、英語を併用している二、三の例外を除けば、そのすべての大学がペルシア語を「教育語」としている。文系理系を問わずすべての教育がペルシア語を通して行なわれていることは注目して然るべきである。

また、イランの初等教育や中等教育用の教科書は、識字教育、また書き言葉の習得に対しても当然のことながら貢献していることも指摘しておきたい。

ペルシア語の文化力をより広義に考えれば、その使用域の広さ(ペルシア語

はアフガニスタンの公用語であり、タジク共和国の公用語でもある。それぞれ、ダリー語、タジク語と称されている)や歴史性も考慮すべきかもしれない。

### 第3節 パフラヴィー朝期の言語政策

#### 1. アカデミー設置以前の言語改革の動き

イランの近代化に伴い、イランは語彙の革新や、新たな国家建設の理念に基づく語彙改革の必要に遭遇したことは既述のとおりである。

イランではアカデミーの設立以前に各種の語彙改革への動きがみられた。まず、1924年には、陸軍省と文部省によって、両省の代表から構成される協会が設立された。同協会が選定し、新たに新語を造成したが、その数は300に及ぶ。

その新語は、航空、軍の組織・機構・武器などに関する語彙が大半を占めている。

いまその語彙の例をあげると、

havāpeymā	航空機	forudgāh	航空、飛行場	havāsanj	気量計
xalabān	パイロット	yekbāle	単葉機	dobāle	複葉機
bālon	気球	'atašbar	機関銃	gordān	大隊
vābaste-ye nezāmi	軍武官			bomb	爆弾

などがあり、いずれも今日でも使用されている。

1932年になると、高等師範学校を中心にして体育・図書館・年鑑などに関する協会が設けられたが、その中に「新語ならびに科学用語協会」が設置された。

この協会には、自然科学、数学、物理学・化学、文学・哲学などの部門が設けられており、1940年までその活動を継続し、その選定による語彙は3000にも及んだ。

参考のため、今日でも使用されている語彙の例をあげておく。

garmāsanj 熱量計      tarāveš 浸透性      hamrixt 同形体  
gaštāvar エントロピー      tapeš 鼓動      peyvaste 連続体

このようにして、各種の言語改革への気運が起こり、熟成し、具体的に新語が造成されてきたが、言語改革（主として語彙改革）は、アカデミーの活動においてますます本格化していった。

次にアカデミー成立の歴史的背景、理念、目的、機構などに関して述べることにしたい。

## 2. アカデミー（第1期）の言語改革

### (1) 設置とその理念

1925年パフラヴィー朝を創設したレザー・シャー（Reza Shah）は、性急かつ強烈的な「西欧化政策」を推進するとともに「イラン民族主義」を促進し、周知のように中央集権主義に基づいて数々の上からの政策を強行に採用していった。

すなわち、西欧化・近代化のために、(1)近代的装備と体制を備えたイラン軍の形成と強化、(2)各種の行政改革、(3)道路・鉄道網の整備、特に南北イラン縦貫鉄道の建設、(4)西洋の商法、民法、刑法などの法律の導入を実施し、イスラーム法を結婚や離婚などの民事の分野に限定するなどのいわゆる「世俗化政策」の断行、(5)工業の促進などの諸改革を実行していった<sup>(11)</sup>。

イランは、イスラーム以前の古代イランの栄光を称揚し、ペルシア語・ペルシア文学を民族的文化遺産として扱い、強力な統一国家建設へ向けて国民の教育を図った<sup>(12)</sup>。このような「イラン主義」の宣揚は、例えば、国名の変更にも表れたが、一連の文化政策においても顕著であった。高等教育機関としてのテヘラン大学の創設や初等・中等教育の学校の整備にもその政策の一端を窺うことができる<sup>(13)</sup>。

かかる諸改革と並行して、トルコの言語政策からの刺激をも受けて、イス

ラーム文化の伝統の桎梏からイランを解放し、近代国家としての改革に専心しようとしたイランは、また、近代化に相応しい「新言語」の育成に向けての努力を開始した。その際、イラン主義の当然の帰結として、言語選択としてはペルシア語がこの「新言語」として選ばれた。

この目的のために、イラン・アカデミー (Farhangestān) が設置されたのである。

このアカデミーは、フランスのそれに倣って、1935年に「ペルシア語の保護、普及、発達のため、ファルハンゲスターネ・イーラーン (Farhangestān-e Īrān) の名称のもとに設置された機関である<sup>(14)</sup>。

ハサン・ヴォスグを議長とする第1回総会が同年に開催されて以来、このアカデミーを中心にして、ペルシア語の純化運動、新語の造成、なかんずく科学・技術用語関連の語彙の整備・制定が着々と進められていった。

ちなみに、ここでいう純化運動とは、ペルシア語からアラビア語要素を駆逐せんとする運動をさす。

ペルシア語がいかに純粋であるかを分析的に示すには、文法構造の固有性を他の言語のそれと比較するという試みを行なっても国民大衆の基盤たりえないので、どうしても語彙の独自性を強調することになる。すなわち、ペルシア語からの外来語要素であるアラビア語語彙の排斥である<sup>(15)</sup>。

## (2) フォルーギー博士の言語改革論

ここで、フォルギー博士の言語改革論について述べる必要があろう<sup>(16)</sup>。

1937年、同アカデミーの正規会員であるフォルギー (Mohammad Ali Foroughi) は、アカデミーに対する「メッセージ」のなかで、アカデミーは、「ペルシア語とペルシア文化の保護を目的とする機関であり、これがすなわち、わがイラン国民性の保護、堅持の手段である」と述べている。

同氏は、その序文において、文化と国語の関係やアカデミーの意義について述べたのちに、第1章では「過去において生じたペルシア語の欠陥と不備」に関して論じ、さらに「将来生じる可能性のある危険」を警告し、その是正

と予防の方法について述べている。第2章においては「ペルシア語の欠陥とその除去」に関し述べ、主として「アラビア語の混用による言語的欠陥とその除去」について考察している。第3章「ペルシア語の不備とその修正の方法」、第4章「ペルシア語に表れた危険に対する予防法」と題して、西洋語によって生じつつあるペルシア語への影響に関して論究している。

同博士の論文の要旨は、(1)アラビア語の取り扱いに関する論考、(2)近代西欧語に対する対処の方法、(3)近代化・西欧化に伴う新しい語彙の問題、の3点にまとめることができるであろう。

(1)のアラビア語彙に関しては、漸進的に除去の方向へ向かうべきであるとす。

一般的にいて、ペルシア語の純粹性との関連において、アラビア語に対しては、①アラビア語彙の混入に対し全面的な否定的態度をとるもの、②アラビア語彙の混入に対し無条件に是認するもの、③中庸的態度を堅持するものなどがあるが、それぞれに論者の思想的基盤や言語観によって、その長短、利害得失は容易には決することが困難である。しかし、言語の実際をみれば、中庸的態度を採るのが実行可能な方法であり、かつ穏当である。

すでに我々が前節でも見てきたように、ペルシア語は、成立の初期からアラビア語からの借用語は極めて多量であって、今日のアラビア語の存在はいわば歴史的必然からの所産であり、容易に除去すべきでもなければ、除去できるものでもない。英語や日本語におけるラテン語的要素や漢語の存在をみれば容易に頷首できるであろう。

筆者としては、言語運用の実際からして、フォルギー氏の中庸的態度に賛意を表するものである。

さらに、フォルギー氏は、近代化に伴う科学技術関連の「専門語」の造成に関して、①西洋語からの借用語に依存する方法、②ペルシア語の言語素材に依存する方法、③アラビア語に依存する方法、などの三つの方法を提案している。そして、できるだけ②の方法によることを奨励しており、理解しやすい単一語、ついで、複合語を用いることが望ましいとし、それでも不可

能な場合には、③アラビア語の使用、最後の手段として、①の西洋語からの借用もやむをえないとしている。

私見によれば、この線に添ったアカデミーの語彙改革はその大筋において功を奏し、特に、②の方法は極めて有効な造語方法であり、今日でもなお有効な方法であると考ええる。

また、③のアラビア語は、すでにイスラーム諸科学で使用され、長い年月を経て定着した語彙を除けば、すでにその活力を失っているものと考えられることは先にも述べた。今日の国際化時代、科学技術に対処できるのは、いまでは決してアラビア語彙ではないことを明記しておきたい。

いずれにしても、①②による方法が最もペルシア語の実態に即しているものと思われる。

結論的に言えば、フォルギー博士の論は中庸を得たものといえるであろう。博士の線に沿った語彙改革によって新たに造られた語彙は、アカデミー発足後に出版されたペルシア語辞典に採用され、すでにある語彙は定着しているのである<sup>(17)</sup>。

### (3) 新語について

さてここで、アカデミーによる新語の実例を二、三あげて、その活動の成果をみることにする。紙面の都合もあるので、ここでは、1937年に出された新語の例に限定して例示することにする<sup>(18)</sup>。新語には、単に一般語彙のみならず、地名も含まれていることを付記しておきたい

新語の意味分野は、軍事、経済、銀行、行政、植物学、物理学、地質学などの多岐にわたる。

#### ① 軍隊の階級名

'artešbod	大將	sarhang-e yekom	大佐	sepahbod	中將
sarhang-e dovvom	中佐	sarlaškar	少將	sargord	少佐
sartip	准將	niru	軍隊	daryāsālār	海軍大將
		daryābān			
	海軍中將	daryādār	海軍少將		

## ② 経済・銀行関連の語彙

'arz 外国為替      seporde 供託金, 預金      bedehi 負債      rasid  
受領書      barāt 手形      siyāhe 送り状      bestānkār 債権者  
mānde 残高      sanad 証券      sefte 約束手形

## ③ 行政関連の語彙

'āmār 統計      pišnehād 提案      bāzbin 監査官      dastmozd  
謝礼, 手当て      bāzdid 監督      namāyande 代表者      bāzras  
検閲官      yādāvari 警告

## ④ 物理学

'āzmuye 実験      'āzmun 検査      barāyand 合成      gaštāvar  
能率, 力率      koneš 作用      qovve 力

## ⑤ 植物学

'angal 寄生植物      'angali 寄生      jens 属      'āvand 脈管  
tire 科      kāse 萼(ガク)      xāme 花柱      kolāle 柱頭  
jur 変種      rāste 目

## ⑥ 地質学

dowr 期      dowre 紀      degardis 変成      degardisi 変成の  
lāye 層      cin 褶曲

## 3. アカデミー (第2期) の言語改革

## (1) 設置

1935年に発足したアカデミー(すなわち、第2期アカデミー)は、53年までその活発な活動を行なったが、その後15年間の活動休止のあと、68年に復活した。さらに、1970年には名称も変更され、Farhangestān-e Zabān-e Irān(イラン言語アカデミー)となった。

同年11月14日に第1回会議を開催、1972年までに6650語に及ぶ新語が提案された。1978年9月30日までその活動を継続した。

ちなみに、初代会長には、文化・芸術省副大臣のサーデク・キヤー博士が選出された。

## (2) 目的・組織

モハマド・レザー・シャーの名のもとに、*Farhangestān-e zabān-e Irān* と題する小冊子が刊行され、目的・機構・研究機関などが定められた<sup>(19)</sup>。

目的としては、「ペルシア語の保護、国家の学問・技術・文化にわたる多様な必要性に応えるべくペルシア語の育成、ペルシアの一層の認識と発展のために古今のイラン系諸言語、方言の調査研究」が掲げられた。

その組織としては、審議会、四つの研究所、図書館、音声学実験所および事務局が設置された。

研究所には、①語彙制定研究所、②ペルシア語単語研究所、③古代・中世の諸言語およびイラン諸方言の研究所、④ペルシア語文法研究所、が設けられた。

活動の最も中心的な機関は、①の語彙制定（選択）のための研究所であるが、その下部機構として、教育、軍隊、経済・商業、医学・自然科学、地理、法律・管理運営、言語・文学、社会科学・政治科学、科学・技術・工業、図書館学、教科書、美術などの部局が設けられた。そして、同研究所の目的は、外来語の除去を図り、純粋なペルシア語による新造語を選定することであった。

それぞれの部局が、少なくとも週に1回2時間は会議を開催し、言語学者の協力を得て新語を選定し、決定することが定められた。

研究成果は、「あなたの提案は何ですか」という形態で出版されたが、手元の資料によれば、①図書館学関連用語集(1973年)、②社会学関連用語集(1974年)、③学問・芸術関連の名称(1975年)、などの英語・ペルシア語対照語彙集が刊行されている。

## (3) 造成新語

1972年、語彙選定研究所から提案されたが、現在ではほとんど使用されていない語彙が含まれている。

性急な国家主義的見地から「純粋な」ペルシア語による新語形成を行なったがための結果であろう。

第1期のアカデミーの新語造成とは違って、学術関連の外来語の排斥は一層の激しさをましてきた感があり、国家主義的で、排他的ペルシア主義を垣間見る思いがする。

以下には、その実例として、あまり普及しなかった語をあげて参考に供したい。

tarkize	バクテリア	šādxāne	キャバレー	pardize	公園
hamisetād	組織, 体系	dodamid	変形した	raxtdān	洋服ダンス
'āmuxtār	教師	bāqrāh	公園道路		

次に今日でも使用されている語として、

dustār (amateur)	アマチュア	goft-o šanud (dialogue)	会話, 対話
darxāst (application)	申請	bumšenāsi (ecology)	生態学
pād-zahr (antidote)	解毒剤	tālār (hall)	ホール
moštzan (boxer)	ボクサー	'āmuzeš (instruction)	教育
guyeš (dialect)	方言	dibāčē (introduction)	序論, 序文
vāj (phoneme)	音素	vāke (vowel)	母音
jahāngardi (tourism)	観光	vākdār (voiced)	有声の
bivāk (voiceless)	無声の	zirsāxt (substructure)	下部構造

をあげておこう。

## 4. 言語の文字化と識字運動

すでに述べたように、イランには、1000年以上にも及び文章語・行政語・

学術語として使用されてきたペルシア語という有力な文字言語の伝統がある。したがって、近代化を迎え、言語的にも国家統一を図る事態に直面しても、言語選択にあたっては、ほとんど何の問題もなく自明であるかのように「ペルシア語」が国家の言語として選ばれた。その結果、国民大衆の識字運動に先立って、国語の文字化を行なわなければならなかった国ではなかった。どの文字をどの言語に付与するかといった問題は当初から存在しなかった。すなわち、例えばインドのように、そもそもどのような文字で言語の文字化を図るべきであるかという識字運動に先行して考慮されるべき問題がなかったということである。

文字化の対象となるべき言語の選択に悩まされなかった理由は、クルド語、アーゼリー語を除いて、その他の諸言語が弱小あるいは弱小すぎる民族の言語であったことに見いだすことができる。このことは、第2節において比較的詳細にペルシア語以外の言語の社会的地位や分布を既述してあるので理解いただけたと思う。

「識字運動の方針は、各々の民族の環境、性格、および自己意識に従って、それにふさわしいものであらねばならない。実際の教育内容は各々の民族固有の文化および文明に基づいたものであるだろう。各々の民族は、それなりの方法で全世界の文化に貢献するものであり、他の文明との実りある対話を率直に求めている。」<sup>(20)</sup>

この声明は、1975年、ペルセポリスで開催されたユネスコの識字運動会議において出されたものであるが、言語選択の問題、文字化問題などの言語問題そのものに対しては踏み込んだ問題意識は表明されてない。またさらに、この声明を率直にそのまま受け取れば、識字運動はそれぞれの言語によって行なわれるべきだとも解釈できなくはない。しかし、統一国家にあって、複数の言語の存在による意思疎通の阻害、伝達の効率性の低下の問題もさることながら、さらにその上にそれぞれの民族が言語の文字化を行なえば、理想には違いないかもしれないけれども、社会的にも、経済的にも非常に難問を提供することになるのも明らかである。

各民族がその固有の言語にそれぞれの文字化を行ない、学校教育はいうに及ばず、行政用語として使用されれば、その負担は単に経済面のみならず、言語学習の面からもかなりの負担を強いられることになる。また、文字言語は、話しことばと違った独特の文法、語彙、音韻をもち、規範的であろうとする傾向をもっており、文字言語が社会全体に普及するにはかなりの歳月が必要であろう。文字言語は我々が考えるほど容易に学習されるものではない。各民族がそれぞれ固有の文字言語を、といえは人道的に響くが、ことはそんなにやさしくはないのである。

いささか皮肉めいた表現になるが、ペルシア語のような文字言語、威信のある言語を有していたことが、イラン(の権力者側、中央政府側、国民の側にも)にとっては、社会的、経済的、学習心理学的にも幸福であったといえるかもしれない。

イランは、成人教育や初等教育などの活動を通して、かねてより識字率の向上に意欲的に取り組んできた。

ここで、イランの識字率の変遷を示すと表1のとおりである<sup>(21)</sup>。

自明のことではあるが、男性と都市部における識字率の高さが指摘できる。また女性の識字率の増加が著しいが、これは、社会的地位の向上や初等教育の普及によるところが多いと思われる。なお、1963年の「白色革命」の6項目の中には、文盲撲滅部隊(知識部隊)の創設が含まれている。その活動は、識字率の上昇や特に農村部の教育や識字にも貢献した。

表1 イランの識字率

	1956	1966	1976	1986
全 体	15.6	29.4	47.5	61.8
男 性	22.2	40.1	58.9	71.0
女 性	7.3	17.9	35.5	52.1
都 市	33.3	50.4	65.4	73.1
農 村	6.0	15.1	30.5	48.4

(出所) *Iran Yearbook 1993*, p. 451.

## 第4節 イラン・イスラーム共和国の言語政策

### 1. 言語選択——憲法と公用語

イスラーム共和国としてあらたに発足した新生イランは、1979年の憲法第2章「公用語、公用文字、公用暦、国旗」の第12条において、「公用語」はペルシア語と規定し、「公用文字」も、ペルシア文字の使用を公的に定めた。すなわち、条文には、「イラン国民の公用および共用の言語ならびに文字はペルシア語である。公式の記録、通信およびテキストならびに教科書はこの言語および文字によらなければならない。しかし、地方における出版、マスメディアおよび学校での地方文学の授業における地方語ならびに部族語の使用はペルシア語と併用する限り自由である」<sup>(23)</sup>と記されている。

これによって、ペルシア語とペルシア文字に優先的特権が法的に与えられ、立憲革命期やパフラヴィー朝の政策よりも一層明確にペルシア語の法的使用が承認された。すなわち、教育語、放送語、行政語としてのペルシア語の使用に法的基盤が与えられたわけである。

一方、ここでいう「地方語」、「部族語」というのは、第1節で列挙した言語のうちペルシア語以外の言語を指し示すことばであり、ペルシア語との併用でなければ、公的には使用できない点でも明確に法的規制が課せられたのである<sup>(24)</sup>。

ホメイニー政権後にも、アラブ人、クルド人、アーゼリー人、トルクメン人、バルーチ人は部分的自治を求めるなど、政府軍との軍事的衝突があった。先に引用したクルド語の公用語化の要求だけでなく、アーバーダーンのアラブ人などのように学校における第一言語としてのアラビア語の教授を要求するなどの動きはあるものの、未だ公的にはその使用は承認を得ていない。

トルクヤマン語でも事態は同様であって、口頭のコミュニケーションにおいてのみその使用が認められている<sup>(25)</sup>。

これらの地方語の公的使用の規制は、前政権と同様である。いや、あるいはもっと積極的にペルシア語による言語統一への規制が強化されたともいえるのではないであろうか。

なおここで、イスラーム革命後においては、アラビア語の学習の強化が図られたことを付言しておかなければならない。

「コーランならびにイスラーム教の科学および学問の言語がアラビア語であり、かつペルシア語文学が完全にアラビア語と混合していることを考慮して、アラビア語は初等教育課程終了後、中等教育課程終了まで、すべての学級およびすべての分野において学習されなければならない。」(憲法第16条)

この条文により、革命後の教育において、アラビア語が一層重要な地位を占めるようになったといえるであろう。

## 2. アカデミー (第3期) の活動

パフラヴィー朝のレザー・シャーによって1935年に設置されたアカデミーは、第二次大戦による一時的活動停止を挟んで、その後も活動を続けてきたことは既述のとおりである。イスラーム革命後の新政権になってからも名称の変更を行ない現在は活動を再開している。いわゆる第3期アカデミーと呼ばれるものであり、ペルシア語の名称は、Farhangestān-e zabān va adab-e Fārsī (ペルシア語および文学アカデミー) と変更され、1990年に発足した。

第1回審議会が、文化・高等教育省によって招集され、1990年に開催され、暫定会長として、ハサネ・ハビービー (Hasane-Habibi) 氏が選出された。さらに、翌年同氏が全員一致によって初代会長に選ばれた。

アカデミーの活動は今のところ未知数であるが、機関誌として、*Nāme-ye Farhangestan* (*The Quarterly Journal of the Academy of Persian Language and Literature*) の刊行が開始され、その第1巻第1号および第2号が、1995までに出版されている<sup>(26)</sup>。

## おわりに

行政機関当局または何らかの国家的機関が、国民の互いの意思疎通や公的使用のために、公的な言語を選定し、国家の言語の多様性を統一し、伝達性を維持し、理想的な状態の改革が必要であると考えたときに、「言語政策」が採用される。したがって、言語選択そのものがすでに中央集権的施策の一環であることは言うまでもないであろう。

一つの公用語を選定することは、複数の公用語を認めないかぎり、必然的に他の弱小諸言語——強いていえば、地理的にも周辺的な言語——の犠牲を程度の差はあるにしろ、何らかの意味で強要することになる。

現代のイラン国内の諸言語にあつては、ペルシア語が、我々が見てきたように、その文化的・歴史的威信と言語的熟成度によって、独占的な地位を享受し、公用語としての地位を確立している。そして現実に政府機関の行政語としてのみならず、学校教育における教育語、学術語としてもその機能を十分に発揮している。

言語研究の立場からすれば、「すべての言語は等価値であり、研究の対象になる」のである。しかし、現実の社会生活では、それは単なる幻想でしかないように思われる。生存のためには、自己の母語を捨てて、公の場ではその国の公用語を使用せざるをえない人々がいるのが、少なくとも日本や韓国などの少数の国を除く、現実である。

文字化の問題、言語選択の問題、識字問題、言語改革の問題などそのいずれをとってみても、必ずしも理想的には事が運ばない解決の困難な問題であることを確認しておく必要がある。

イランにも、少数民族問題の存在することを否定できない。しかし、幸運にも、一部アジアの国々におけるような言語問題それ自体が強い引き金になった流血の惨事・惨劇や「言語戦争」、「言語紛争」の類は発生していない。

しかしながら水面下では弱小少数民族の言語使用者がいることを忘れては

ならない。彼ら少数民族に対しては、適切な教材と指導方法・教授方法の開発により、言語学習の機会を与えることは、為政者や教育者あるいは言語研究に携わる者の義務であろう。言語の対照研究や教授法の開発が必要な所以である。

最後に、ペルシア語は、将来にわたって、その独占的・特権的地位を享受し、保持していくであろうし、また、その文化的威信からみても、言語構造ないし成熟度からもイランの「公用語」として最もふさわしい言語であり、他に代替の言語が存在しえないことも、ここで再度強調しておきたい。

[注] \_\_\_\_\_

(1) 立憲期、パフラヴィー朝およびイスラーム共和国に関しては、加賀谷寛『イラン現代史』近藤出版社、1979年／加納弘勝『イラン社会を解剖する』東京新聞出版局、1980年、参照。

(2) 民族と言語の関連などに関する参考書として次の書をあげておく。

Edward Sapir, *Language*, New York: Harcourt, Brace & Co., 1921 (泉井久之助訳『言語』紀伊国屋書店、1957年)／Peter Trudgill, *Sociolinguistics: An Introduction*, Penguin, 1974 (土田滋訳『言語と社会』岩波書店、1980年)／*Iranian Studies*, Vol. 26, Nos. 1-2, Winter/Spring 1993／西島建男『民族問題と何か』朝日新聞社、1992年／フロリアン・マルクス (山下公子訳)『国家と言語』岩波書店、1987年。

さらに、言語のもつ社会的結束力については、Edward Sapir, *Culture, Language and Personality*, Selected Essays Edited by David G. Mandelbaum, University of California Press, 1970 (本書の特に「言語」の項を参照)。

(3) *Britannica Book of the Year 1995*, Encyclopaedia Britannica Inc., 1995 による。同書によれば、総人口は、5961万4000人。

(4) 加納弘勝『イラン社会を解剖する』東京新聞出版社、1980年、210～211ページによる。

(5) 近世ペルシア語の成立に関しては次の書を参照。

G. Lazard, "The Rise of the New Persian Language," R.N. Frye ed., *The Cambridge History of Iran*, Vol. 4, Cambridge: Cambridge University Press, 1978, pp. 595-632／Richard N. Frye, *The Heritage of Persia*, A Mentor Book, New York: The New American Library, 1963／G. Lazard,

“Pahlavi, Parsi, Dari,” C.E. Bosworth ed., *Iran and Islam*, Edinburgh: Edinburgh University Press, pp. 361-391.

- (6) 基本語彙としてのアラビア語語彙。これらの語彙がなければ日常生活にも支障を来すような基本的語彙であり、ペルシア語では言い換えが不可能なアラビア語からの借用語である。

nafas 呼吸    harakat 運動    haqiqat 真実    raqs 踊り  
 qam 悲しみ    mowj 波    fekr 考え    hasad 嫉妬  
 noqte 点    kasif 汚れた    xoruj 出口    nerx 価格  
 taraf 方向    maqreb 西    xatar 危険    vaqt 時, 時間  
 hāl 状態    towr 方法    markaz 中心    noqre 銀

なお、イスラーム教関連の語彙やイスラーム科学のなかで歴史学、地理学、天文学、数学などの専門用語には当然ながらアラビア語からの借用語が多量にみられる。

- (7) ペルシア語における広義の借用に関しては、縄田鉄男「現代ペルシア語に於ける借用に関する覚え書」(『言語学論叢』〈広島文教女子大学英文学会〉1983年) 281~296ページ/同「ペルシア語の単語連結」(『オリエント』〈日本オリエント学会〉第37巻第1号, 1994年9月) 137~150ページ, 参照。
- (8) ハールマン (Harald Haarmann) の著書は、早稲田みか編訳『言語生態学』大修館書店, 1985年による。
- (9) MB Medien & Bucher Verlagsgesellschaft, Bonn発行。  
 引用した統計は、Chapter 15 Mass Media & Arts, pp. 461-465による。
- (10) *Iran Yearbook* 1993, p. 13によれば、国民のペルシア語使用能力は次のとおりである。

(%)

	国民全体	都市部	農村部
can speak & understand	82.7	90.9	73.1
can only comprehend	2.7	1.5	4
does not understand	14.3	7.3	22.7
handicapped	0.3	0.3	0.3

2言語併用および中央・周辺部のペルシア語話者の使用能力を窺い知ることができる。

- (11) パフラヴィー朝下における諸改革については次の書を参照。

Amin Banani, *The Modernization of Iran, 1921-1941*, Stanford, California: Stanford University Press, 1961/Hossein Amirsadegji, *Twentieth-Century Iran*, London: Heinemann, 1977/Peter Avery, *Modern Iran*,

London: Ernest Benn Limited, 1965/Joseph M. Upton, *The History of Modern Iran: An Introduction*, Harvard Middle Eastern Monograph Series, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1968/加賀谷寛『イラン現代史』近藤出版社, 1979年。

- (12) 国家統一と言語問題については、第2章の注記に掲載された書物を参照。

Upton, *The History of Modern Iran*, は、国家統一の内的阻害要因として、自然・地理的要因、少数民族の存在（多民族国家に共通の問題として）、社会構造、事大主義などを列挙している。

民族意識の中心には必ず言語意識（言語帰属意識）があり、言語問題は民族問題と密接な関係にある。

この点については、石田英一郎『文化人類学入門』講談社, 1976年/祖父江孝男『文化人類学のすすめ』講談社, 1976年, 参照。

- (13) イラン主義。

1935年に、古代ギリシャ以来の西側の呼称である「ペルシア」を改め、「イラン」と称した。

なお、イラン (Iran) という名称は、古代ペルシア語の碑文にも現れていることは周知の事実であろう。古代ペルシア語では、ariya-なる語形で表れる。

この名称の語源、意義などについては、上岡弘二「イランの民族と文化」(『イスラム世界』〈日本イスラム協会〉第44号, 1994年) 37~60ページ。

ちなみに、ペルシアなる名称も古代ペルシ語碑文に、parsa-なる語形でみられる。

教育問題については、Georg Lenczowski ed., *Iran under the Pahlavis*, Stanford, California: Hoover Institution Press, 1978.

- (14) イラン・アカデミーに関しては、Ali Akbar Dehkhoda, *Loghat-Name*, Vol. 40, pp. 97-109, を参照。

なお、参考のため同アカデミーの設置要項の第2条に掲げる事業内容を次に記して参考に供したい。

- ① ペルシア語の語彙ならびに慣用句の整理を目的とする辞典の編纂。
- ② 生活の各分野に関する語彙、専門用語はできるだけペルシア語をもってこれに当てるように選択する。
- ③ 不適當な外来語を除去することによるペルシア語の整理。
- ④ 文法の作成、語彙選定のための法規の廃止、設置ならびに外国語語彙の採択、除外。
- ⑤ 商工関係に関する語彙、術語の蒐集。
- ⑥ 古文献よりの語彙、術語の蒐集。
- ⑦ 地方語の語彙、慣用句、ことわざ類、物語、逸話、歌謡類の蒐集。
- ⑧ 古文献の探索、紹介およびその印刷物の奨励。

- ⑨ 文学の真实性、韻文、散文の特質に関する考察の指導、および過去の文学なかの好評を博した作品の選択、ならびに方向を誤ったものの除去およびその将来のための指導。
- ⑩ 文学的傑作の出現を図るための詩人、作家に対する奨励。
- ⑪ 正確でかつ難解でないペルシア語で書かれた有益な著作類の編纂ならびに翻訳を行なうための学者への奨励。
- ⑫ ペルシア文字改良の研究。

この要項に対しては、W. Hinz, “Neue Formen des persischen Wortschatzes,” *Zeitschrift der Morgenländischen Gesellschaft* 91, Wiesbaden, 1937, pp. 68-98にドイツ語訳がある。また、フランス語訳は、前掲研究雑誌のMasseの論文にみられる。

- (15) ペルシア語の浄化(純化)とは、アラビア語要素の排除を意味するが、近代化以降のペルシア語における西洋語(イランの場合はそのほとんどがフランス語である)の排除をも意味する。過激な国家主義者は、「純粋な」ペルシア語を求めた。
- (16) フォルギー氏の論文は、*Armagan* 22, 336-44/501-12.ただし、本論文は、Henri Masseにより、“La lettre à l’academie iranienne de S.A. Mohammad Ali Foroughi,”として*Revue des etudes islamiques* 3, 1939, pp. 15-74に訳出されている。

なお同氏の論述に先立ち、Taqizadehはその論文“Jonbesh-e melli-ye adabi” (National Literary Movement)において、過激なペルシア語純正義者をエキセントリックで、皮相で、思慮に欠けるものとして糾弾している。

フォルギー博士、タキザーデ博士ともに穏健な言語感の持ち主で、ペルシア語の実際を歴史的にも、文化史的にも、また言語の内的構造からしても両博士の見解を支持するというのが筆者の考えである。

過激なアラビア語排斥は、無駄であり、無為であったことは、この70年あまりの間のその後の言語を知るものにとっては、もはや明らかである。

- (17) 例えば、次の現行の種々のペルシア語辞典には、採用されている。  
S. Haim, *The One-Volume Persian-English Dictionary*/idem, *The Shorter Persian-English Dictionary*/J. A. Boyle, *A Practical Dictionary of the Persian Language*, London: Luzac & Company Ltd., 1949.  
ボイルの辞典には、1941年までにアカデミーによって採用された新語が含まれている。その序文を参照。
- (18) 前掲のHinzおよびMasseを参照。

なお、R. Lescot, “La reforme du vocabulaire en Iran,” *Revue des etudes islamiques* 3, 1939, pp. 75-96をも参照されたい。

Abbas Aryanpur-Kashani and Manoochehr Aryanpur-Kashani, *The*

*Persian-English Pocket Dictionary*, Teheran: Amir Kabir Publishing Corp. 1979/ idem, *The Combined New Persian-English and English-Persian Dictionary*, Mazda Publisher, 1989.

- (19) モハammad・レザー・シャーの名で出された次の小冊子を参照。原文は、ペルシア語で、*Farhangestān-e zabān-e Irān*と題されている。

この冊子には、目的、機構などの規約があり、さらに250語余りのペルシア語の新語が英語とともに提出されている。

本文に引用のペルシア語（対訳の英語を含む）の語彙はすべて、この冊子からのものであること断っておきたい。

- (20) 前掲『言語と国家』276~277ページ。

- (21) 前掲*Iran Yearbook 1993*, p. 451.

- (22) 白色革命に関しては、次の書物を参照。

Mohammad Reza Pahlavi Aryamehr Shahansha of Iran; *The White Revolution*, Second Edition, Tehran: The Imperial Pahlavi Library, 1967.

同書の第6章は知識部隊に関する記述があり、識字運動にも触れられている。

なお、白色革命については、小学校5年生の教科書にとりあげられている。そのテキストは、'*Enqelab-e Sefid*（原文ペルシア語）として文部省から刊行されている。

- (23) 以上の条文の日本語は、日本イラン協会編『イラン・イスラム共和国憲法』（1987年6月）によったが、1989年11月の改訂翻訳版においても言語に関する条文内容には修正加筆はない。

英文の憲法は、“*Constitution of the Islamic Republic of Iran*,” *Middle East Journal*, Vol. 34, No. 2, Spring 1980, pp. 181-204, にあげられている。

ペルシア語文は、例えば、*Hoquq-e 'asāsi dar jomhuri-ye 'eslāmi-ye Irān*, Tehran, *Soroush*, 1364, Second Editionを参照。

- (24) ペルシア語では、*zabān-e mahalli* (local language) といわれ、慣用ではペルシア語以外の言語はすべて、この名称のもとに一括される。

言語系統的には、ペルシア語と同列にあるクルド語、バルチー語などのイラン系の言語も、系統を異にするトルコマン語やアーゼリ語も等しく「地方語」と呼ばれる。

第1節においてやや詳細に言語事情の解説を行なったのは、この点を踏まえてのことであった。その記述からも分かるとおり、地域的にはこれらの地方語はイランの北方、西方あるいは南部沿岸に集中しており、それらの言語のうえに国家語であるペルシア語が存在しているわけである。文字どおり、地方と中央の言葉である。ペルシア語はイランの都会の言語でもある。

- (25) 前掲の加納弘勝『イラン社会を解剖する』の第8章「イラン革命を見据える

少数民族」を参照。

- (26) No. 1およびNo. 2に、「アカデミー小史」,「第3期アカデミーの審議会議事録」および「第2期アカデミー」に関する論文がある。

また、第1巻第1号および第2号に収められた論文は、「法と言語」,「ササン朝の称号」,「語彙論」,「アラビア語文献にみるペルシア語要素」,「サーディーの韻律」,「シャーナーメにおけるパフラヴィー語起源の語彙について」,「イランにおける公文書・私的書簡に見られる書出しと結語の表現形式について」などである。書評としては、ソグド語辞典に関するものなど。

これらの内容からみるかぎり、新語造成などの言語改革（語彙改革）よりもむしろ、学術研究の様相が強いように思われる。

ちなみに、第3期アカデミーの目的などは次のとおりである。（『ペルシア語』〈I〉〈II〉, 273/1, イラン教育省発行, 1995年による）。

ペルシア語は、イスラーム世界の第2の言語であり、イスラーム文明の学問、文学の価値ある遺産の大きな部分の鍵であり、イラン国民の文化的アイデンティティである。

ペルシア語および文学アカデミーは、ペルシア語の保護のため、次に掲げる目的を実現するために設置する。

- ① イランの国民性のアイデンティティの要素の一つであり、イスラーム世界の第2の言語であり、かつイスラーム文化の担い手であるペルシア語の勢力と純粋性を保護すること。
- ② 学問や文学上の思想の表現のためおよび現在および未来の世代の歴史的、文化的創造のための洗練された言語を育成すること。
- ③ イラン国の内外におけるペルシア語、文学の普及およびその領域の拡大を図ること。
- ④ 時代と生活の要請に相応しいペルシア語の育成を図り、その純粋性を守りながら、人類の科学技術の発展に寄与すること。

### 〔参考文献〕

- 「本文」や「注」に触れられてない文献を以下に記しておく。
- スミス、フィリップ・M.（井上和子・河野武・正宗美根子共訳）『言語・性・社会』（シリーズ・21世紀の言語学）大修館、1987年。
- フィッシュマン、J.（湯川恭敏訳）『言語社会学入門』大修館、1974年。
- デル・ハイムズ（唐須教光訳）『ことばの民族誌』紀伊国屋書店、1979年。
- 根岸富二郎・岡崎正孝編『イラン——その国土と市場』科学新聞社出版局、1981

年。

Elwell-Sutton, L.P., *Bibliographical Guide to Iran*, Sussex: Harvester Press, 1983.

*Area Handbook for Iran*, Washington, D.C.: American University, Second Edition, 1971.

*Iran*, Washington, D.C.: American University, Third Edition, First Printing, 1978.

Wilber, Donald B., *Iran*, Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1967.

最後に、特にイランの諸言語とその社会言語学的諸問題を論じた書物をあげる。

Geiger, W. und E. Kuhn: *Grundriss der iranischen Philologie*, 2 Bände.

Strassbourg: Karl J. Trubner, 1895-1904. (再版は, Berlin: Walter de Gruyter, 1974)

Oranskij, Iosif M., *Les langues iraniennes*, Paris: Librairie C. Klincksieck, 1977.

Schmitt, R., *Compendium Linguarum Iranicarum*, Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag, 1989.

Spuler, B., *Handbuch der Orientalistik, Iranistik, Linguistik*, Leiden: E.J. Brill, 1958.

Sebeok, Th. ed., *Current Trends in Linguistics*, Vol. 6. Linguistics in South West Asia and North Africa. The Hague: Mouton, 1970.

Mohammad Ali Jazayery, "The Arabic Element in Persian Grammar: A Preliminary Report," *Iran (Journal of the British Institute of Persian Studies)*, London, Vol. VIII, 1970, pp. 113-124.